

BOOK REVIEW

ひとと作業・作業活動 新版—作業の知をとき技を育む

山根 寛先生がこれまで数多くの著書を執筆してきたその原動力となるルーツは何だったのだろうか。多くの OT の皆さんはそのことに疑問をもたれないだろうか。

本書を読み進めていく中で、筆者はまたたまそう思える箇所に出くわし、そんな経験をしておられたのかと感じ入った。

「リハビリテーション医から『作業療法はもう少し科学的に考えて治療しないといけない。たとえば、革細工でスタンピングのような動きが訓練に必要な患者がいれば、その患者にはスタンピングを中心にさせ、着色など細かく遅い動きの作業は、それが必要な他の患者にさせればいい。作業の要素をしっかりとらえて訓練にもちいないと効率が悪い』といわれた。(略)何か釈然としないものを感じた。それは、作業は全体があってこそ意味があるのではないだろうか、その一部の要素を訓練の手段として取りだして使うのは、作業本来の力を活かすことにならないのではないか」(p195)

作業本来の力を活かす。このことは山根先生の執筆の根底に一貫して通底する壮大なテーマではないだろうか。

作業療法に関する教科書は多く出版されているが、一人の OT によって、自身の経験を宝に言葉が紡がれた作業療法の本というのは残念ながらほとんど見つけることができない。本書はそれが成し遂げられた稀有な本であり、このような本をつくられた山根先生とたまたま同時代に生きていることを本当に幸運だと思う。なぜなら山根先生ご自身から、本書であらわされた作業療法の醍醐味を、質感を持って知ることができるのだから。

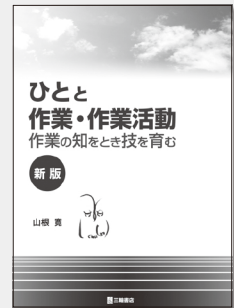
さて、本書本来の構成ではないが、唯一性を持った一人の人間である山根先生によってこそ描かれた、描ききれたと思われる本書の独創性として筆者は次の3点を挙げたい。

- ① 作業の本質性についての哲学を基盤に備えている。
- ② 身体論や脳科学の知見を駆使し、人間の特性について身体性から社会性にまで広く奥行を持って言語化している。
- ③ ①、② を融合したかたちで、作業分析として、作業の治療・援助としての活用手法を既存の理論を統合しつつモデル化している。

以上の3点を見ると、何か小難しいことが書かれてあるのではないかといふられる人もいるかもしれないが、ひとと言ってしまうと以上のような難解と思われる内容が、平易な言葉の選択と連なりで、誰が読んでもストンと腑に落ちる文章で書かれていることも本書の特徴と思われる。しかも後読感がよく、筆者は山根先生のおおらかなやさしい世界観を追体験している感じを受けた。

「作業療法の対象は、近代医学が置き去りにした対象の主観、生命の直観を視野に入れた、人間の健康と生活そのものである。医学・医療とリハビリテーションの相補性において、広く人間の健康や生活をとらえるには、仮説、演繹的推理、実験、検証という近代科学（数学的自然科学）の手法による純粋な真理の探究や新理論の構築に加え、直感・経験・類推の積みかさね、経験の構造化といった、質的研究、エスノグラフィックスタディ、現象学的研究などの、心理学や社会学、哲学でもちいられる研究手法をも駆使する新たな視点が必要となる」(p208)

まったくそのとおりだと思う。後進者として山根先生の眺める雄大な景観に一步でも近づき、さらなる歩みを進めたい。最後になるが、本書のような日本で生まれた作業療法哲学の大著が海外で広まることで、今度は日本が海外ヘインパクトを与えるようになることを願う。



● 山根 寛=著

(B5判/290頁/3,500円 + 税/三輪書店/2015年)

評者

田島明子

聖隷クリストファー大学
リハビリテーション学部
作業療法学科 准教授、
作業療法士